

引揚船

佐賀県鹿島市 平倉 与一

戦後20年11月、第二復員局（旧海軍）が募集していた復員船乗組員に応募する。乗船したのは「筑紫丸」と言い、戦時中貨客船として建造途中から海軍に徴用された当時数少ない客船で、病院船として引揚に就航される。

○ 外交関係者の引揚げ

最初の航海はマニラに行く。岸壁接岸時、フィリッピン人の罵倒、投石を受ける。反日感情の最も強い時期だった。

引揚者は戦時中、欧州各国に派遣されていた在外高官とその関係の方々だ。大使・公使・書記官・駐在武官各位とその家族もおられた。記憶は定かではないが、戦後どこかに収容され、ポルトガルの船でマニラまで送られる。そこから日本「浦賀」への帰国に本船が就航の任に当たった。

航海中何回か大使、公使の講演を拝聴する機会があった。戦後の西ドイツの復興の様子や、それに比べ、聞くところによると（乗船後乗組員との話し合いより）日本の復興状況は西ドイツほど良くないようだとされる。

アメリカ占領軍の警戒は厳重で、航海中は潜水艦が尾行していたらしい。

浦賀入港時はマッカーサー直属の部隊が警備に当り、引揚者は船内で一人ずつ取り調べられた上で上陸が許されていた。乗組員は必要な碇泊要員のみ在船し、大半は旧海軍潜水学校の兵舎に収容される。入り口には番兵が立ち許可なく戸外に出られず、用便にも一々許可を受ける始末だった。

○ 廈門・汕頭（中国）

旧陸軍の復員者が主で、階級章はないが軍隊式に統制がとれていた。この方面は穏やかな戦後処理がなされたのだろう。

普通、引揚者用の食糧は用意されていたが、ここでは主食、副食（野菜、魚の干物等々）も相当積込む。かなり恵まれていたように思う。しかし本船は沖に碇泊し小型船で復員者、食糧等が運ばれた。当日はうねりが高く危険な作業で、戦時中よくニュースで見せられた〇〇上陸作戦のシーンそのものだった。

○ フィリッピン（リングエン・コレヒドール）

旧陸軍の復員者が多く、激戦地の生存者達（戦争中は山に逃げ込んだり、捕虜になった人達）で病人も多い。中には少数だったが戦時中発狂した人もいて、予め鉄格子の檻を作って行きそこへ収容する。気の毒な犠牲者だ。この人達の看護は大変らしく、それには半狂人になった戦友が当り、その人の言うことは良く訊いていたと言われていた。

○ 葫蘆島（中国）

私達が接した邦人の引揚げで、一番惨めで気の毒な人達だった。旧満州（現在、中国東北地方）の奥地から着のみ着のまま追われ、掠奪、屈辱に耐え、やっと辿りついた人達で疲れきった表情が伺われた。それらの状況については、一時期いろいろと書かれている。船で見た二、三について。

- ・ある若い婦人が4、5才の男子の手を右手に、3、4才の女の子を左手に、背中に乳呑児を背負って乗船してくる。荷物は男子の背にリュックサックが一つだけ。その子に何が入っているのか聞いたところ、父親の遺骨だと言う。勿論母親の乳は殆ど出ないらしく、乳呑児はか細く泣くばかり、乗船中我々でできるだけことはしてやった。その子達も今では50才半ばになっているだろう。
- ・本船は病院船として使われ、日赤の看護婦さんも2班ずつ乗船していた。引揚者は病人が多く、疲労困憊して漸く船に辿り着いた人達で、帰国を目前にして死んでいった人も多く出た。船尾に作られた火葬場の煙が絶えることはなかった。よそ目に見る煙が悲しみを誘った。
- ・夜、暑い船倉内から出て星空を眺め、涼みながら、これまでの苦勞から開放され、初めて我が子を連れて両親の元に帰る喜びを舷側に座らせた子供と楽しんでいた父親が、一瞬の油断でその子を海中に落とした話も聞いている。
- ・頭を丸坊主にし、男の服を着た娘さん達も船に乗ってからは安心したのだろう。だんだんと明るさを取り戻し、船員達とも談笑するようになった。短い船旅だがドラマチックな場面がいろいろと展開された。

○ サイパン島・テニヤン島

日本空襲におけるB29爆撃機の発着基地であり、また、玉砕でもよく知られた所で両島は海峡を隔て向き合った島である。生存していた邦人を沖縄に運ぶ。

テニヤン島では米軍が引揚げ、港に山積みされた食糧品を取りに行く。珍しい物ばかりで、一食一食包装されたレーション（携帯食料）は、朝、昼、夕食で内容が異なり、煙草、マッチ、釣り具まで入ったものがある。また缶詰でも種類が豊富で、中でもアイスクリームの素を見つけては嬉々としたものだ。これを見ても国力の差がはっきりし、感心しながら舌鼓をうった航海だった。

○ ラングーン（ビルマ）

インパール作戦で大敗し、数少なくなった生き残りの復員者の帰還に従事した。ラングーンに収容されて体力を回復したのだろう、思ったよりも元気そうに見えた。

この航海では船の機関にトラブルが発生し、2日ほど沖で修理をし、引揚者に迷惑をかけた。広島の子品に入港した夜、飛び込み自殺者が出る。甲板上にそろえてあった履物に物悲しさを感じる。漸く帰国し、明日は故郷に帰られる矢先の出来事。我々には計り知れない重圧があったのだろう。

○ ラバウル

海軍航海隊で知られたニューブリテン島のラバウルから最後の復員者を運ぶ。余りにも有名

だったので興味深いものがあった。湾内の港は青く澄み、穏やかな水面は静まりかえっていた。しかし見渡す所に船、飛行機、砲台等の残骸は隠せなかった。

乗船してきた人達に飛行場や兵舎等の跡地や戦闘の様子を聞いたものだった。第一線から見放されたあとは、農作物を作り自給自足の生活をしていたと説明される。

○ あとがき

旧満州・中国・南方アジアに残された軍人、邦人の引揚げに従事し、断片的ではあるがそれぞれの一部を記録してみた。各々の地域、時期によっても引揚者の様子に大分違いが見られ、その国々の取り扱い、待遇にも差があったように感じられた。

あれから50年、忘れてはいけないし、また、忘れられない終戦直後の貴重な体験を痛感し大切に止め置きたいと思っています。